

## 2017の秋

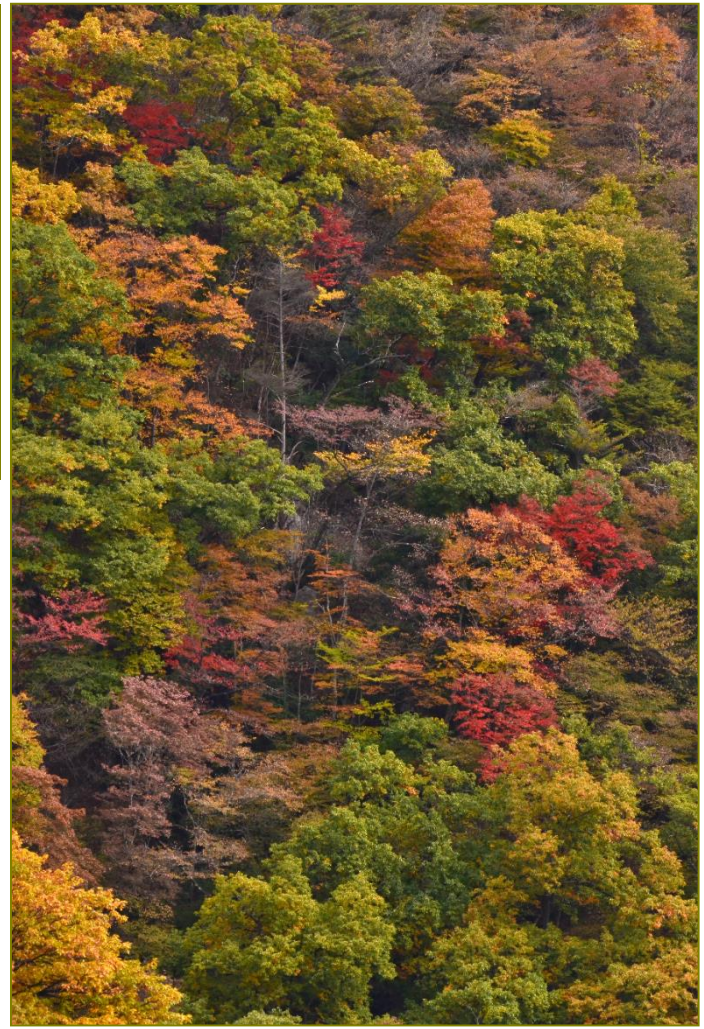


雨や高温が続いた夏は終わり、いよいよ秋のシーズンに変わります。今年の夏が異常気象だったのかは分かりませんが、秋までの天候は何らかの形で紅葉に影響を与えます。今年はどうな「紅葉」が訪れるのか気になります。

あきる野には紅葉スポットが多いので、これからのお出掛けは楽しみです。

(右写真)大岳沢周辺の急斜面に広がる広葉樹林の紅葉(2016年11月10日撮影)

(下写真)昨年、秋の終わりに寒波が訪れ、あきる野では珍しい雪と紅葉のコラボが見られました。(盆堀周辺の山、2016年11月25日撮影)



## 伐採地

最近、森林整備が活発化している関係で、山中の伐採地が増えています(写真)。パッと見て、長い年月を掛けて育った森を切るのには「自然破壊ではないのか」と考える方がいると思いますが、実は伐採されるほとんどの森はスギ・ヒノキの人工林で、いつか木材として利用することを目的として育てられた森なので、伐採するのは当たり前、もしくはそうであるべきなのです。多くの針葉樹の植林地は、長年に渡る手入れ不足により、全国的な生物多様性の低下や鳥獣被害などの重大な原因となっています。



伐採された人工林は、再び針葉樹が植えられることが多いのですが、部分的に広葉樹が植樹されることもあります。スギ・ヒノキの植林地でも、木が生長するまでは開放的な環境として機能します。草原が不足し、森が暗くて育つことが出来なかった草本は、このような開放的な環境で芽吹き、多くのチョウやバッタ、甲虫、爬虫類、ノウサギなどの草食哺乳類、さらに、それらを獲物にする猛禽類などの支えになる環境となります。「森を育て切る」を繰り返すことによって、様々な「森の段階」が揃い、ギャップのある多様な環境が生まれます。でも、幼少期から自然と向き合ってきた私は、自然のバランスを取り戻すため、スギ・ヒノキの人工林ではなく、広葉樹林や草原などを基本とした、様々な動植物が生息しやすい環境を増やす必要があると思っています。





10月は、鳥類の渡りの季節です。夏に繁殖を終えて南下する鳥類や越冬のため北部や山岳地帯から温暖地に飛来する鳥類など、多くの種類が渡ります。滅多に見られない鳥類も観察できる「ベスト・チャンス」です。

今回は、2015年に発行したVol.63の「秋のワタリ」の続きで、あきる野を渡る鳥類の一部を紹介합니다。

山でも、河原でも、公園でも「秋の渡り」が行われています。さっ！双眼鏡の大活躍です！

サシバ鷹柱(たかばしら) :カラス程の大きさの鷹で、「夏鳥」として本州北部まで飛来します。秋に越冬地へ渡る時、上昇気流が発生しやすい場所で多くのサシバが集まり、旋回しながら風に乗る姿を見ることができます。あきる野で、9月下旬は渡りのピークですが、10月上旬頃まで南下するサシバが出現します。(※写真右上に拡大した個体の写真を重ねています。)



クサシギ:シギ類の一部の種類は、渡りの途中で多摩川や秋川流域に一時滞在することがあるため、あきる野でも珍しいシギ類を見る機会があります。



ハイタカ:このエリアでは、冬季の代表的な猛禽類です。秋と春の渡りの時期は特に数が多くなります。やや小型で、メスの場合はオオタカとの識別が少し困難ですが、オスは特徴的で美しい鷹です(写真)。



オオジュリン:北海道や本州北部で繁殖し、秋から温暖地に南下するため、あきる野の河川敷にも現れます。少し地味な野鳥ですが、この鳥の飛来と共に、私は秋が深まるのを感じます。



コシアカツバメ:その名の通り、腰が赤いのが特徴的で普通のツバメと識別が容易にできます。夏鳥として本州の至る所に飛来しますが、あきる野では主に秋の渡りの時期に見られます。 [パプロ]

